
IS ~ロスト・エヴォリューション~

雅太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（ロスト・エヴォリユーション）

【Nコード】

N4723Z

【作者名】

雅太郎

【あらすじ】

デジタルワールドで、急にデジモンたちの進化が失われてしまった。そんな中、現実世界ではISを乗れる男性が二人も現れてしまった！？しかも、その片方はパートナーデジモンを持つテイマーであつた！

二つの世界が動くとき、新たな物語が始まる！！

0：崩れ始める世界（前書き）

ついつい早く原作が書きたくなり書いてしまいました。

0：崩れ始める世界

デジタルワールド。

それは、デジモンと呼ばれる生物が暮らすもう一つの世界。

デジモンは己を鍛え、自らを進化させることで新たなデジモンとなり強くなってきた。デジモンには、進化の段階があり、幼年期 成長期 成熟期 完全体 究極体と進化していくのだ。

だが、ある日を境にデジモンたちは急に進化ができなくなってしまった。

原因は不明であり、誰もが進化できずに困ってしまっていた。

いずれは、無理にでも進化しようと多くのデジモンたちが殺しあい、データをロードしあうだろう、そうしてしまつたら、デジタルワールドは崩壊に繋がってしまう可能性だつてある。

だが、そんな中、一人の少年が現れた。

デジモンを信頼し、信頼させ、パートナーデジモンを持つ少年。

少年のパートナーデジモンは、こんな仲でも少年の持つ聖なるデバイスであるデジヴァイスを使い、進化させることができる。

そんな少年のような人を、デジタルワールドでは『テイマー』と読んだ。

1：入学

右を見る…あるのは、こっちを興味深そうに見る視線ばかり。……
左を見る…あるのは、右側のときと同じく視線ばかり。…前を見る
……クラスの半数近くの視線だけ…
頼りになる相棒には今は会えない。……これはキツイな…
何で俺はここ…IS学園にいるんだ？

IS学園とは、IS…正式名称は『インフィニット・ストラトス』
というマルチフォーム・スーツを学ぶ学校だ。ISは、既存の兵器
を凌駕する性能を持つ、とある天才が造った兵器だ。だが、ISに
は大きな欠点がある。それは、女性にしか反応しないのだ。だから、
IS学園は女子校なのだ。
…そう本来ならば。

「えっと…織斑おりむら 一夏いちかです。」

つと、現実逃避はこの辺にしておくか…
ここでの唯一の救いが、もう一人男がいることだ。そう、今自己紹
介をした織斑のことだ。

「えっと、その……………以上です！」

瞬間、女子たちがこけた。

正直言うと、俺もこけそうになった…クラスの後ろの席にいる俺が

らでも解るくらいに、クラスメイトたちはもつと言え、と言つ視線を送つてたのは解つた。なのに……あれはないだろ……

……ズビシッ！

「アガッ!？」

「織斑。貴様、自己紹介もまともに出来んのか」

「げ、げえっ!？か、関羽!！」

……ズビシッ！

「誰が三国志の名将だ」

2度も振り下ろされる出席簿……あの音は、出席簿からでていい音なのか？

そして、俺の本能が告げている……あの人に逆らえば、殺られる!？

「ち、千冬姉!？な、なんで……」

……ジビシャッ！

「ここでは織斑先生と呼べ。諸君、私が織斑おりむら 千冬ちふゆだ。飛ぶこと出来ん、ひよっこである君たち新人を1年で使い物になるように育てるのが私の仕事だ。返事はYesかはいで答える」

担任のありがた〜いお言葉……これ、最後の反論の余地ないよな？

普通ならきつと、反発があるんじゃないや『キヤ〜〜!!!』『……えっ？

「本物の千冬様よ〜!」

「私、ずっとファンでした!」

「私、お姉さまに憧れてきました!」

……何?このクラスは……入学して、自己紹介の時点で帰りたくなつたのは、初めてなんだが……

「はあ… 何で私のクラスはこんな奴等ばかりなんだ…」

それはきつと学園側の陰謀だと思いますよ？きつと。

「ち、千冬姉？どうしてここに…」

「…ズドンッ！」

「織斑先生と呼べ」

さつきから織斑どれだけ叩かれてんだよ？あれじゃ、脳細胞が死にすぎじゃねえか？

つて、さつきから「姉」つて？

「もしかして、織斑君つて千冬様の弟？」

「織斑君がISに乗れるのも、それが関係してるのかな？」

へえ、織斑は”あの”織斑千冬の弟なのか？

織斑千冬、ISの世界大会の第1回モンド・グロツソに日本代表で出場し、総合優勝。ブリュンヒルデの称号を持つ世界最強のIS操縦者だ。だけど、第2回のモンド・グロツソでは途中で危険してから引退してたけど、IS学園で教師をやってたのか。

「まあいい、もう一人の男子。自己紹介をしろ」

「…はい」

席を立ち上がると、このクラス全生徒からの視線を浴びる。

相棒、助けてくれよ…

『いや無理だつて』

何故か幻聴で相棒の声が聞こえた気が…

幻聴なら、せめてはげますような幻聴が聞こえてほしいよ…

「えっと、咲坂 誠まことです……」

「それで終わりじゃないだろうな？」

「ッ！？趣味は探検。特技は、ISの武装造りです！よろしく願
いします！」

不意に織斑先生に睨まれて、背筋に冷や汗をかく。
もういや……この学校……

2：もう一人の男（前書き）

やっと誠のパートナーデジモンが次から出せるぜ…

2：もう一人の男

「はあ…」

1時間目の授業が終わり、休み時間に入った。

あれから、自己紹介も直ぐに終わってしまい、休み時間に入ったのだが…

周りは、クラスメイト以外にも他のクラスや他の学年の生徒が見に来ている…誰か助けてくれよ…

「な、なあ？」

「ん？」

俯いていた顔を上げると、其処には俺の苦痛を分かち合えるもう一人の男、織斑 一夏がいた。

「えっと、咲坂でよかつたっけ？」

「ああ、そうだけ。そんなお前は、織斑であってるよな？」

「ああ。っと、俺のことは一夏でいいよ」

「そっか。なら一夏、俺は誠でいい」

まさか、一夏の方から話しかけられるとは思わなかった。

本当は、昼休み当たりに話しかけに以降と思ったんだがな。

「わかった。それにしてもよかった…俺以外に男がいてくれて…」
「ははっ、さすがにここに男一人はきついからな…想像しただけでストレスで死ねる…」
「まったくだ…」

一夏も俺と同じ事を思い浮かべたのか、苦笑している。
あれ？一人のクラスメイトが近づいてくるが…なんだ？

「少しいいか？」

「ん？…お前、箒か？」

「一夏、知り合いか？」

「ああ。幼馴染だよ」

箒、と呼ばれた女生徒を見る。

ポニーテイルにしてある黒髪に少しつりあがった眼つき、凜としていて抜き身の刃のような印象を持てる。確か…篠ノ之^{しのの} 箒^{はつ}だったな

「咲坂。一夏を借りるぞ？」

「おう。ごゆっくり〜」

「解ったよ、箒。それじゃ、誠。また後でな」

篠ノ之さんが一夏の手を引いて去っていくのを、軽く手を振って見送る。

さて…何するか…久々に続きでも考えるか。

俺は、カバンの中から一冊のノートを取り出し、一番新しいページを開く。

「……やっぱりこの武装に射撃武装を加えるとなると、近接装備自体の重量が増して大剣では振り回しづらくなるか？なら、ここ

は大剣よりもショートソードくらいのサイズなら……」

「ね、ね、さつきー？さつきから何言ってるの〜？」

「ん、君はクラスのこと……」

「私は布のほとけ仏ほんね 本音だよ〜」

ISの武装造りに熱中していると、俺の目の前にぶかぶかの制服を着た女性徒が立っていた。

ぶかぶかで袖が見えず、眠たそうにしている眼や雰囲気から何かこつちものほほんとした雰囲気を持つ少女だ。

「本音ね。で、さつきの質問の答えだけど、ISの武装の開発だよ。まだ理論の段階で考えてるけどな……」

「へえ〜、さつきーってホントにISの武装が造れるんだ〜」

「ガセかと思われてたのかよ……って、さつきーって俺のことか？」

「うん〜。咲坂だから、さつきーだよ」

「にやろ……なんか俺だけあだ名って負けた気がする……なら、俺がさつきーなら本音はのほほんさんだ！」

「やった〜！さつきーからあだ名貰った〜」

子供のように無邪気に喜ぶのほほんさんを見て微笑ましく思う。しかも、一つ一つの動作がのろいせいとか、凄く和む。…これが、癒し系なのか？

……キーンコーンカーンコーン

「あ、チャイムだ。それじゃ、私は席に戻るね〜」

「あいよー……って、席隣じゃないか」

「そうだった、てへへ〜」

眼を細めて頭を小突くのほほんさん……うん、可愛い子だな。

* * *

2時間目は、副担任の山田^{やまだ} 真耶^{まや}先生によるISの基礎知識の授業だ。

正直、基礎過ぎて暇だな…俺は、兄さんがISの研究をしてたんでその影響でISの基礎はよく知ってるし、他の人たちもちゃんと予習してあるみたいだから、解らない奴はいないだろ。

「織斑くん？どうかしましたか？」

「えっと、その…」

一夏がなにやら挙動不審だが、一体どうしたんだ？

まさか、解らないところでもあったのか？

「織斑くん、何でも質問していいんですよ？なんたってたって私は、

先生なんですから」

「じゃあ……はい」

「はい、織斑くん」

「…全く解りません」

「へ？」

…ズゴオオオツッ！！

一夏の「解りません」宣言に俺を含むクラスメイトたちは、机から転げ落ちてしまった。

おいおいおいおい…全くって…そりゃ無いんじゃないのか？

「織斑、貴様入学前の参考書を読んだか？」

教室の隅で腕を組んでいた織斑先生が、一夏に問いかけをする。
一夏は、少し考えた素振りを見せるときっぱりと告げた。

「古い電話帳かと思つて捨てました!」

「――ズバンツ!」

「必読と書いてあつただろうが!」

あゝあゝ普通、必読と書いてある本を捨てるか?

再発行してくれるらしいけど、一週間であれを覚える何て鬼畜だろ……
そうしている内に、2時間目の授業が終わつたのだった。

* * *

2時間目が終わつた瞬間、一夏が俺の机の前までやつてきた。

「な、なあ誠。お前は、あの授業の意味……解つてたのか?」

「ん? ああ、さっきの授業ね。解つたぞ。俺は、兄さんがISの研究をしてたんで俺もついでにISについて習つてたからな」

「……それって、何時の頃だ?」

「えつと……8歳くらいかな? 兄さんがISの発表があつた1年後くらいから研究してたし」

俺がそう応えると、一夏は「8つの頃から……」と、呟いた。

まあ、俺は他と比べて特殊だからな。

「なあ! 俺にISについて教えてくれ、誠!」

「すまんが……OKだ」

「そつか……やつぱ駄……って、いいのかよ!? なんでOKする前に謝つたんだよ!」

一夏、それはノリだよ。
何気にお前は、ツツコミのセンスがあるからな、ついついからかい
たくなるのさ。

「そんじゃ、放課後から居残りでやるぞ。ただし、俺の授業は厳し
いぞ?」

「はは、やってやるぞ」

* * *

放課後になると、一夏は燃え尽きていた…

「おい、一夏?」

燃え尽きている一夏に話しかけると、ISについての恨みなどを呟
いている。
いや、確かに難しい内容だけど、だからってIS自体に恨みを呟く
なよ…

「あ、織斑くんに咲坂くん。教室に残ってたんですね?」

「あり?山田先生?」

「ど…どうかしたんですか、山田先生」

俺と一夏しか残っていなかった教室に、山田先生が入ってきた。

のだが、山田先生が入ってきた時に扉が開いたが、その先には無数
の女性徒が…ここは上野動物園か!?

俺たちは、ここでは檻に入ったパンダ扱いか!?

「寮の部屋が決まったので、その鍵を渡しに来たんですよ」

俯きながら、こつちをチラチラと見て話す山田先生を見てみると、この人は男性に慣れてないんだな、と解った。

ただな、一夏。お前はさつきから、ちよくちよくどこを見ているんだ？確かに山田先生の胸は、一般の女性より大きめだが、女性の胸を意識して見るのは変態だぞ？

「こつちの1025号室のが織斑くん、1001号室のが咲坂くんですよ」

「俺が1025で、1001が誠か。結構、離れちまつてるな」

「まあ、男が二人そろって何か悪巧みされるのでは？とか意見があったんだろ」

確か、寮って基本数字が若い順に出入り口とかに近いから、ありがたいな。

1001なんて、一番若いだろ。

「そうそう、咲坂くん。織斑先生が、「寮で何か遭ったら連絡するかお前が解決しろ」って行ってましたよ」

「……なして俺が？」 「なんで誠が？」

「それは、元々1001号室は寮長室だからだ。そして、1年の寮長は私だ。せつかく部屋をお前に渡すんだ、代わりに寮長の仕事もやってもらおうかと、思ってたな」

「お、織斑先生……」 「ち、千冬姉……」

……スパーン！

一夏の頭に、またもや必殺の出席簿が命中し悶絶していた。

と言っか、この人……俺たちが気付かないように、わざと気配を消して来たな。

と、言っか！

「織斑先生！なんで、俺が寮長の仕事をしなくちゃいけないんですか！？」

「仕方ないだろう。一人部屋は、私の寮長室しか空いてなかったんだ。そして、私が移動するのは職員用の宿舎だ。そこでは、寮長の仕事は出来ん。だが、お前を見知らぬ女性徒と相部屋にするのも、織斑が寮長をするのも不安だな。これが、せめてもの妥協案だ」

「ぐっ…確かに…」

「おまけに、お前の中学の職員の方から話を聞く限り、素行もいいならば、お前に任せてもいいだろうと私は判断しただけだ」

「はあ………解りましたよ、やりやあいんでしよう！」

「潔いのはいいが、教師には敬語を使え！馬鹿者が！」

――スパーン！

織斑先生の出席簿が、俺の頭に命中した瞬間、俺は意識を失った。こんな痛みを味わって、よく一夏は無事で…いられ、るな……

「知らない天井だ…」

眼を覚ますと、そこはホテル顔負けの豪華な部屋のベッドの上だった。

あれ…ここどこだよ？

とりあえず起き上がり、辺りを見渡すと机の上に俺のカバンと一枚の紙が置いてあった。

「誠へ

これを読む頃には、もう眼を覚ましてるだろ？

とりあえず、言っておくけどその部屋は、お前の部屋だ。

千冬姉の出席簿（凶器）による一撃で気絶したんで、悪いけど勝手に上がらせてもらった。

で、千冬姉からの伝言だけど、俺たち男は大浴場の使用は禁止らしい。ほら、女子の前や後に風呂はいるのはどうかでな。だから、しばらくは部屋のシャワーを使えって。

後、部屋はちゃんと業者の人が掃除済みだから、気にせず使えって言うってだ。

初日で色々あったけど、お互い頑張ろうぜ！

PS 俺の部屋には、いつでも遊びに来ていいぜ！

一夏より」

一夏には、色々感謝しないとな。

きつと、気絶した俺をここまで運んでくれたのは一夏だろう。

寮までは、50mしか無いとは言え、人一人運んだんだ。きつと、大変だったに違いない。

明日、何か一夏におごってやる。そう決心する俺であった。

3：パートナーと寮長の初仕事（前書き）

筭の喋り方ってこれであってたっけな？
と、思いつつも投稿します。

3：パートナーと寮長の初仕事

一夏の書いた手紙を、折りたたみ机の上に置いてから、今日まだパートナーのあいつと会ってない事に気付いた。

はあ…あいつはよく外に出たがるし、このまま放って置いたら、絶対後で何か文句言われるだろな。

なので、仕方なくあいつを外に出してやる事にした。

「はあ…リアライズ」

ベルトに取り付けておいたデジヴァイスを手を持ち、そう呟く。すると、デジヴァイスの画面から光があふれ出る。その光は、徐々に人型に近い形になっていく。

光がおさまると、そこには青い肌の子供に近い体型をし耳と尻尾をはやした小さな竜がいた。

「やっつっつっつと！！出られた〜〜〜！遅いぜ、誠〜」

「仕方ないだろ、ブイモン…こっちは全寮制の学校で、お前が付いてくるって言っただから？」

「でもよー。ずっとデジヴァイスの中じゃ、疲れちまうぜ〜」

こいつの名前はブイモン。俺のパートナーで、デジタルモンスター

ー（略してデジモン）と呼ばれる生き物だ。

デジタルワールドと呼ばれるネットとかに存在する世界の生き物なのだが、こうやって現実世界リアルワールドに実体化も出来る。

そう言えば、ブイモンと出会ってもう12年経つんだよな。

俺が3歳くらいの頃だったか、兄さんのパソコンを俺が遊び半分でいじってた時、パソコンからデジタマって言う卵が出てきてコイツが生まれたんだよな。そのときは、チコモンって言う幼年期のデジモンだった。

ちなみに、デジモンには、幼年期 成長期 成熟期 完全体 究極体と姿を進化させる習性を持っている。ブイモンは下から2番目の成長期のデジモンだ。

さて、ここでさっきブイモンを召喚したときに使ったデジヴァイスの紹介をしよう。

デジヴァイスは、デジタマからチコモンが生まれたと同時にデジタマの殻がデジヴァイスとなって出来たんだ。

デジヴァイスは、パートナーのデジモンを進化させる働きや闇を浄化できる能力、パートナーデジモンの収納する事が出来る。最近、デジタルワールドではデジモンが進化する事が出来ないって言う異変が起きてる中、デジヴァイスを使えばパートナーを進化させることが可能なんだ。

そして、デジヴァイスでよく使う機能がパソコンなどからデジタルワールドに繋ぐ扉ゲートを開く事ができる。俺は昔からこの機能を使って、デジタルワールドを探検してたしな。

デジヴァイスの機能はこんな所か。

「なあ誠、俺ハラ減っちゃったよ」

「はいはい。カバンの中に、菓子が入ってるからそれを食べてくれ」

「あいよー……っとう い棒だ！しかも、たこやき味！」

ブイモンはこれで放っておけばいいだろう。

さて…っと。簡単なキッチンもあったし、冷蔵庫の中に何か入っていないか？

……まったく、入ってないし。仕方ない、食材に関しては明日織斑先生に聞くか。

はあ……今日は、軽く予習して寝るか。ブイモンは菓子を食べるのに夢中だし。

そう思い、机に向かおうとした瞬間だった。

- - -プルルルル！プルルルル！

「な、何の音だ!?!」

「で、電話みたいな音だが…!」

不意に電話が鳴る音がして、俺とブイモンは驚いた。

冷静になって音の元を探してみると、脱衣所に入るドアの横に電話が取り付けられていた。

これから電話の音があったんだな。

正体も解り、直ぐに電話を取る事にする。

「はい、もしもし」

『えっ!?!……そ、その声って咲坂くん!?!』

「あゝ…うん。そうだよ」

『な、なんで寮長室に咲坂くんが!?!』

「まあ…色々とあって今は寮長代理なんだよ」

織斑先生…寮長代理について誰にも言っただけですか…

もし寮長代理で、反発があったらどうする気ですか…

などと頭を抱えつつ、寮長室に電話してきた子から話を聞くことにする。

「それで…寮長室に電話してきたって事は、何かあったの?」

『あ…その、ゴメンね？ちょっとお隣が五月蠅くて…』

「了解。其処は何号室？」

『その…1025室です…』

「それじゃ、俺が何とかしておくから安心してくれよ？」

『う、うん…ありがとね、咲坂くん』

電話を切ってから、ブイモンに出かける事を告げる。

それから、1025室に向かうが、1025…アレ？確か、何か聞いたことがあるような…

とりあえず、そこに向かって歩いてみると…何故か、女性徒たちの群れが出来ていた…何コレ？

と言つか皆さん？ラフ過ぎませんか？ここには、男の目もあるんですよ？一応…

「あ〜！咲坂くんだ〜！」

「はあ…悪い、少し通してくれ。1025室に用があるんだ」

そう言つと、女性徒たちが道をあけてくれる。

これで通れる！と、思ったのだが…道は途中で途切れていた。

「箒〜！頼むから開けてくれよ〜！」

「何やってんだ…一夏？」

「あつ、誠！」

何か一夏が、飲み会に付き合ったから夜遅く帰ってきて閉め出されたサラリーマンに見えた。

「いや、俺はサラリーマンじゃねえし！」

「勝手に人の心を読むなよ！お前は読心術でも使えるのか!？」

「普通に声に出して喋ってたぞ!！」

あれま、失敗したか。ってか、思い出したな。

1025って、一夏の部屋じゃないか。

まあ、お遊びはこれくらいにして、仕事するか。

とりあえず、一夏をほつといて1025の部屋をノックする。

「すみません。少しいいですか？」

「……なんだ？」

1025号室のドアから出てきたのは、不機嫌な顔をした篠ノ之だった。

そうか、この部屋は一夏と篠ノ之の相部屋だったのか……今思ったが、常識的に考えてやばくて？

年頃の男女が同じ部屋だし……まあ、織斑先生もいるから大丈夫か？

「篠ノ之もこの部屋だったのか。悪い、少し俺と一夏を入れてくれないか？話があるんだ」

「……入れ。一夏もだ」

「サンキュー。おい、一夏。凹んでないで、早く戻って来い」

ずっと一夏の事を無視してたのか、一夏は凹んで体育座りで落ち込んでいた。

中々戻りそうも無く、一夏の襟首を持って1025号室に入ることにする。

「それで、話とはなんだ？」

「悪い。そのまえに一夏を正気に戻すから、それまで待ってくれ」

「解った。なら、そこを退け」

「へ？……ああ」

今だ落ち込んでいる一夏を正気に戻すために何とかしようとするが、篠ノ之に一夏の前を退くように言われる。

そう言えば、一夏と篠ノ之は幼馴染だったな。なら、この状態の一夏を正気にも戻す方法を知ってるだろう。

そう考えてると、篠ノ之は何故か竹刀を構え始める……えっ？

「面ッ!!」

「……パンツッ！」

「痛ってええええ!!?」

竹刀を構えた篠ノ之は、そのまま一夏の額目掛けて竹刀を振り下ろした。

……なあ？竹刀って防具も付けてない奴に使っても平気なのか？

「あ、あれ？俺は何してたんだ？って、誠！部屋に来てたのか!？」

「って、戻ってるし!？」

「一夏は他の奴と比べて頑丈だ。この程度、どうってこと無い」

そ、それもそうか…一夏は、今日何度織斑先生の出席簿をくらったことやら……

俺の場合は、一撃でノックダウンだったぞ…

*誠の場合は、当たり所が悪かったです。

「ま、まあ、一夏が正気に戻った事だしいいか。…さて、一夏と篠ノ之に言わなくちゃいけない事がある」

「どうしたんだ、誠？急に部屋に来て、言わなきゃいけないことって?」

「言わなければいけないこと、とは何だ？咲坂」

「簡単な事だ。二人がさっきの騒動を起こしたせいか、この部屋の隣に住むことになった子から苦情が来た。だから、大人しくしてく

れ」

「む…それはすまなかつた。だが、何故それを咲坂が言うのだ？普通は、寮長がやるものだろう？」

「あ…そう言えば、誠は寮長代理だったな」

まったく…織斑先生には困ったものだ。

寮長代理に任命してきた上に、いきなりこんな騒動が起こるんだからな…もしかして、一夏が何かするだろうと思って俺に寮長代理を任命したのか？

「待て。何故、一般生徒であるお前が寮長代理をやっている？」

「いや、部屋がまだ調整中でまだ空いてないらしくてな。それで、俺は寮長室である1001号室に住む事になったんだ。そしたら、ここの寮長の織斑先生から寮長代理に任命された…」

「そ、そうか…まあ、頑張れ」

「ああ、ありがとう。さて、話を戻すが、ここの防音設備は完全に音を遮断する訳じゃないんだ。結構大きな音だと隣に聞こえるらしい。だから、周りに迷惑をかけないためにできるだけ大きく騒がないでくれ。でないと、俺も織斑先生に連絡する事になるし…」

「そ、そうか…悪かった………」

寮長室に置いてあった部屋のマニュアルを持ってきておいてよかったな。

というか、お前等…土下座してまで、織斑先生を呼ばれるのは嫌か！？

「ま、これから気をつけてくれ。一応、俺が解決してくつもりだしな。二人は、他に決める事があるだろう？邪魔者は退散させてもらおうぜ」

「ああ。また明日な、誠！」

「今日はすまなかつたな、咲坂」

一夏と篠ノ之の部屋を出てから、集まっていた生徒たちを解散させる。

そう言えば、この部屋のドアが空いてたな…はあ、明日織斑先生に新しいドアも注文しないとな。

部屋に戻ると、ブイモンは既に眠ってしまった。

さすがに今日は、もう何もしたく無くなったのでシャワーを浴びて直ぐに寝ることにした。

3：パートナーと寮長の初仕事（後書き）

オリジナル設定として、寮室には寮長室に繋がる電話が1つ取り付けられている設定です。

キャラクター紹介

咲坂 誠さきざか まこと

一夏より少し背が低い、この作品の主人公。
別に転生したとか、憑依したとかは無い。専用機持ち。

性格は、結構あっさりしていて、人付き合いはいい。そういう面では、一夏と似ている為一夏とは仲がいい。

家族構成は、父親と母親。兄はいたが、両親が一度離婚していた際に死亡。兄の死がきっかけで、両親は再婚した。元々、小さなすれ違いで離婚していただけた。

恋愛経験は無く、今まで人を好きになる事はあっても、あくまでlikeのためloveになっただけは無い。また、そのためか結構鈍感な部分がある。

趣味として、ISの武装を考えてることがある。それは、自身の専用機に使える武装を考えているからである。

パートナーデジモンは、ブイモンである。

デジヴァイスは、デジモンアドベンチャーに出てきた初代デジヴァイスの形をしている。ただ、機能は02とセイバースの機能も加わっている。

容姿は、アドベンチャーの八神^{やがみ} 太一^{たいち}を高校生にした姿。トレードマークとして、ゴーグルを着けている。

ブイモン

誠のパートナーデジモン。

幼い頃の誠がパソコンをいじっていた時に、パソコンからデジタマが現れ其処から生まれた。

幼い頃から一緒だった為、誠との仲はかなりいい。

ブイモンの存在を知っているのは、誠と兄だけだった。

性格は、陽気で負けず嫌い。デジモン同士で戦う時、その負けず嫌いが発揮し、最後まで諦めない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4723z/>

IS ~ロスト・エヴォリューション~

2011年12月29日11時46分発行